

銃後 の 美談から

—総力戦下の「世間」話・序説—

重信幸彦

紙幅の都合上、美談資料は内容を要約した。要約は「……」で括った。「」内は原文。旧漢字・旧仮名使いは適宜改めた。固有名詞は省略又は記号化した。

1、銃後というへ世間▽

一九三七（昭和一二）年七月、我々は、「暴文膺懲」をかかげて「支那事変」に突入し、その時、総力戦という戦を初めて本格的に経験しようとしていた。今回は、その時に編纂された「銃後美談」と名付けうる一群の美談を取り上げ、分析したい。「美談」とは、

何が「正」しく「善」であり「良」であるか、決して自明ではない。その輪郭を、話／物語の力により描き出そうとする、そして受け手がそれを一つの規範として内面化していくことが期待されている仕掛け、としておこう。

まず、「支那事変」の時代以降の戦の日々のありようは、当時盛んに使われた「銃後」という言葉の意味に象徴されていた。もともと「銃後」は、銃を構える兵士自体を意味したが、日露戦争後の桜井忠温の戦争文学『銃後』（一九一三）あたりから、戦場の直ぐ後で救護・補給業務を行なう者の活躍を示すようになり、一九三一年の「満州事変」のころより戦争を支える「国内」全域の日常生活を

最近我々は、民俗学者や口承研究者が、言葉／話を集め、それを資料集に編み上げること 자체が、一つの「世界／リアリティ」を構

指すようになった「加納、一九九五、六五」。それは、大がかりな近代兵器を使用した戦を遂行するため、背後の日常生活から大量の物資と人員を供給しなければならない総力戦という戦の形態ゆえに

出現した新たな語意の変化だった。そして総力戦では、単に人員と物資を動員するだけでなく、「国民」全ての意志を戦に向けて組織化しようとする。それゆえ文化、思想、精神のあり方が冗舌に語られる事になった。「盡忠報國」「挙国一致」「堅忍持久」といった標語をかかげて一九三七年一〇月に結成された国民精神総動員中央連盟も、こうした総力戦の特質を反映したものだった。

ここで対象とする「美談」もまた、間違いなく、総力戦を組織する仕掛けの一つとして使われた。こうした戦争と関わる美談を軍国

美談として括ることができるが〔季刊現代史、一九七三〕、総力戦下の軍国美談は、兵士の武勇・忠勇を語り「英靈」を顕彰する、兵士を主人公とした「軍事美談」と、兵士の家族などを主人公とした「銃後美談」の二つに分類することができる。

もちろん美談と戦争の関係 자체は、必ずしも総力戦という状況に限られるわけではない。日露戦争時の「軍神・広瀬武夫」に代表される兵士を主人公とした軍事美談の存在は、近代史では日清・日露戦争、さらに明治維新まで遡ることができる（それは、忠魂社／靖國神社という制度の成立、「英靈」という概念の創出や、その顕彰のメカニズムの成立という問題などと抱き合せで考えるべきだろう「田中丸、一九九八」参照）。また、兵士の家族、特に母を主人公にした美談も既に存在していた。日清戦争の時に造形された「水

兵の母」や、日露戦争の時に登場した「太郎やあい」などは、いずれも国定教科書に採用された典型的な例と言える。

しかし戦場を舞台とした軍事美談と一対のものとして、一群の話

がことさら「銃後美談」と名付けられて編集されるのは、管見するところ「満州事変」以降のことだ。銃後美談が、「赤誠／熱誠」など時代の決まり文句を伴いながら日常生活を語り、「もう一つの戦場」をかたどる仕掛けとして編集される必然性は、総力戦という構造のなかに胚胎した。そして今回、「支那事変」という時期に焦点を絞つたのは、我々が総力戦とどう関わったのか、それを初期の経験に探つてみようと考えたからに他ならない。

さらにもう一つ、視座を確保する補助線として「世間」をあげておきたい。「世間」とは、人と人、人とモノ、人と言葉／情報（＝話）の関わり方がおりなす関係性のありようと広くとらえておく。ただし、ここで言う「世間」とは、美談のなかで語られた「世間」を指す。美談が時代のなかで形にする「世間」は、必ずしも実在の

関係性と正確に重なるわけではなく、まず、言葉のなかで構築された関係性としてとらえねばならない。しかしまだ言葉／情報（＝話）は、日常談話の場、そして家庭や学校、マス・メディアなど、関係性を織り上げる仕組みのなかで編集され流通する過程で意味を胎み、日常の雰囲気／リアリティを構成していく力を持つ。銃後美談として語られた「世間」もまた、その時代の言語空間のなかでアリティを構成する効力を期待されて編まれた政治的言説の一つだつた。銃後美談のなかで「世間」がどのように編まれ、語られる

かを問うことは、戦時下の日常の言語空間にはたらく言葉／情報

(二話) の政治を読み解く作業の一つになるだろう。

この小論により「支那事変」時の「銃後美談」を通して、総力戦下の総動員型の生活のありようを、日常の言語空間のなかに探つていく作業に向けて、一つの予備的な見取り図を提示したい。

2、△世間▽を編む

検討する銃後美談の素材は、雑誌『キング』の次の付録美談集から取り上げる。

『支那事変 美談武勇談』(『キング』一九二八(昭和一三)年

一月号付録) 以下『美談』

『支那事変 忠勇感激談』(『キング』一九二八(昭和一三)年

三月号付録) 以下『感激談』

「以上、永峰、一九九七、一〇三～一五〇」
この『キング』が、「支那事変」を前面に押し出した特集を始めるのは一九三七年十月号の「日支事変大特集」からだ。その後この「大特集」は「戦いは之からだ！」刻下緊要の大文字」という翌年三月号の特集を経て四月号まで六回続く。そして特に一九三八年一月号では、別冊『支那事変 美談武勇談』と「最新支那明細大地図、満蒙、ソ連国境大地図」の二つが、三月号では別冊『支那事変 忠勇談感激談』と「広東・香港付近明細地図、漢口、南昌地方明細地図」が付録として付けられた。

一月号の新聞広告を見ると、本誌の内容広告より先に大きく付録

美談集の書名が打ち抜かれ、「全家必携、之ぞ万代に遺る記念の大付録！」というコピーとともに全目次が掲げられており、この付録美談集がことに力を入れた企画だったことがうかがえる「東京朝日新聞」一九三七年二月九日)。

そして翌二月号の投書欄「読書俱楽部」には新年号付録『美談』に対する複数の反響が掲載されている。その一例を挙げよう。

「キング新年号付録支那事変美談武勇談は入手後直ちに閲読致し遂に夜を徹し候 将士の上下相交わらざる盡忠報國の生々しき事實を眼の辺り見るが如く不知不識合掌して遠征將士に感謝の至情を捧げ読み終わるまで感激感謝のみに候 此付録を一読する者は等しく必ずや國民精神総動員の根本を固め其の実を挙げざれば止まざるの大覺悟を為す事と確信仕候 何卒何れかの方法により至急第二輯を御発行下さる様切望に不堪候 (福岡県

この『美談』や『感激談』は、それぞれ前半を兵士を主人公にした忠勇／武勇の美談にあて、後ろ三分の一程度を応召／銃後美談にあてている。今回は忠勇／武勇談（軍事美談）は分析の対象としないが、この二つが抱き合せのものとして構成されいたことは、確認しておかねばならない。前線兵士の軍事美談と銃後美談、両者の組合せは総力戦の構造そのものをなぞつていてるからだ。

そして新年号『美談』に杉山元陸軍大臣が寄せた「序」は次のよう呼び掛ける。「ご承知のとおり、近代戦は、単に軍人のみの戦争ではなく、国民全体の戦争であり、眞の國力戦であります。従つて国民一人残らず戦う意志を持たなければ、一日と雖も戦争ができるないのであります。それは、この総力戦における銃後のあり方を説いており、先に示した『美談』を称賛する投書の、「盡忠報国」「遠征將士に感謝」「大覺悟」といった用語をちりばめた言説と同じ言語空間にあることが読み取れる。

では、この「覚悟」を語る銃後の話群は、どのようにここに集められたのだろうか。様々な活字メディアを渉獣し全ての話の来歴をたどることは未だ成し得ぬが、しかしそのほとんどが既に公表された話題を下敷きにしていたと推測できる。実際、話の幾つかは、東京朝日新聞に掲載された話題と共通しているのである（付表1を参考、以下本文で資料に言及する際は、表の整理番号を示す）。

さらに『美談』『感激談』に収められた話の幾つかは、ほぼ同時

期に編纂されていたと考えられる木村定次郎編著の美談集（一九三七）「一九三八」）とも内容が重なっている。一度公表された話題が複数の活字メディアで使い回しされている。ちなみに木村の美談集もまた、前半を兵士の忠勇武勇の軍事美談、後半を銃後美談（木村の場合は「報国篇」という構成）にしている。

こうした話の流通過程を、次のように推測することが可能だ。

まず、話が流布する最初の一歩は話の取材にあつた。新聞記者、通信員の取材、また新聞社の献金受付や軍用献金を集めるために臨時に設けられた陸海軍の恤兵部が、銃後の人々の「熱誠／赤誠」を語る話題を収集する機能を持つことになった。恤兵部は、金額に関わりなく匿名で献金に訪れた者を、しばしば調査しており（これには持ち込まれた金が犯罪と関わるか否かなどを確認する意味があつたとも考えられる）、結果的に献金の向こう側に固有名詞を伴つた銃後美談の素材を掘り起こすことになった。

そしてそれらの話題が新聞に紹介され、さらに『キング』付録を始めとする單行本美談集に収められていく。

また今回は詳述できないが、美談のなかには活字以外のメディアを動員して流布されたものもあつた。たとえば「山内中尉の母」〔A一三〕は、まず東京朝日新聞で数回にわたり上げられ、後に木村の『忠勇報国美談』やキング付録『美談』に掲載されるが、一方で一九三七年十一月にティチクから佐藤惣之助・作詞、古賀正男・作曲、藤山一郎・唄『山内中尉の母』、十二月にはボリドールから松阪直美・作詞、長津義司・作曲、関種子・歌『忠烈山内中尉

付表1

『支那事変 美談武勇談』(キンギ) 昭和十三(一九三八)年一月号付録) より、「応召美談・銃後美談」一覧

No.	美談のタイトル	東京朝日新聞 37年7月→38年2月	木村、1937→1938→口	備考
A一 A二 A三 A四 A五 A六 A七 A八 A九 A一〇	愛国の電波は飛ぶ(見よ! 病妻の苦心) 最後の勤務を果たして(消防手の出征) お父さん万歳(孫に代わって七十九歳の老婆) 母と妹の死(後に残るは身重の妻) 深夜の愛国結婚(孤独の三児のため) この母、この子(勇士を門前で拒む) 夢に見る父(重傷を秘して見送る) 遺骨を抱いて(見送りの旅、死出の旅) 刑務所の万歳(やはり立派な日本軍人) 俺の命令だ(父の死に情けの帰郷)			
A一 A二 A三 A四 A五 A六 A七 A八 A九 A一〇	涙の出陣(愛児を残す貧家) 米国紳士の恩情(出征兵の家族を護る) 山内中尉の母(読むもの皆感涙) 夫の戦士を感謝(細川相子さんの手紙) 黒髪の贈物(真心を綴る妹の手紙) 御身の働きを聞かず(兵士を叱る軍國の母) 愛児の死を秘す(健気なる銃後の妻) 従軍嘆願書(虚弱な子を持つ父と母)			
10 8 類話 10 18	9 3 (家庭欄、9 2 8 26、9 2 (家庭欄、9 2 9 3 (家庭欄、9 2 10 29 9 24 (上海発23日 10 29 (王家宅28日 発・高山電話 口→P、 326 イ→P261、280			
手紙	母ヤスの手紙(海軍省人事局宛) 妻相子の手紙(吳海軍人事部長宛) 妹から兄への手紙 母から戦地の息子への手紙 国定教科書美談 「水兵の母」類話 妻から戦地の夫への手紙 母から陸軍大臣への手紙/父から陸軍大臣への手紙			
	←兵士の家族の話・手紙文→ ←兵士本人の出征に関わる話・出征と家族→			構成

B七	B六	B五	B四	B三	B二	B一	A一〇	A一一	A一二	A一三	A一四	A一五	A一六	A一七	A一九b	A一九a	A一八b	A一九a						
天使)	乳呑子を残して傷病兵の看護（かがやく白衣の書）	お上に献上の軍用金（三十三年前の奉納大願）真心刻む時計（尊し、一巡査の餞け）輝く水先案内人（白茆口敵前上陸の殊勲者）父よ！子よ！吾が妻よ（塹壕に拾つた烈々の遺書）	あはれ幼児の盜みに泣く（勇士涙の教訓）親友の位牌を負うて出征（前田少尉の悲壮な決意）	お上に献上の軍用金（三十三年前の奉納大願）真心刻む時計（尊し、一巡査の餞け）輝く水先案内人（白茆口敵前上陸の殊勲者）父よ！子よ！吾が妻よ（塹壕に拾つた烈々の遺書）	献金を申し出る手紙 民間人の戦闘への協力 戦場で拾われた日記のなかの遺書	「支那事変 忠勇談・感激談」（キング）昭和一三（一九三八年三月号付録）より、「出征美談・銃後美談」一覧	見知らぬ紳士（名士の銃後援助）扶助を断る一人妻（敢然起つ八百屋と夜店）この美しい隣人愛（愛国婦人会員が援助）全生徒の労力奉仕（リーダーは小学校長）中学生の突貫援助（留守宅を死守する学友）朝鮮同胞の赤心（率先愛國運動を興す）全国挙って献金献品（驚くべき巨額に達する健気な六少女（納豆売つて献金）梅干し持つて静岡から（奇特な老人の真心）重罪囚の献金（血と汗の結晶十年）外国人の献金（英國将校・白系露人）支那人の献金（行商人と料理人）	見知らぬ紳士（名士の銃後援助）扶助を断る一人妻（敢然起つ八百屋と夜店）この美しい隣人愛（愛国婦人会員が援助）全生徒の労力奉仕（リーダーは小学校長）中学生の突貫援助（留守宅を死守する学友）朝鮮同胞の赤心（率先愛國運動を興す）全国挙って献金献品（驚くべき巨額に達する健気な六少女（納豆売つて献金）梅干し持つて静岡から（奇特な老人の真心）重罪囚の献金（血と汗の結晶十年）外国人の献金（英國将校・白系露人）支那人の献金（行商人と料理人）	9 / 14	同一記事「巷ニ満ツ応召美談」より	10 / 9	イ ↓ P、 333 イ ↓ P、 252	9 / 14	同一記事「巷ニ満ツ応召美談」より	10 / 9	イ ↓ P、 333 イ ↓ P、 252	9 / 14	同一記事「巷ニ満ツ応召美談」より	10 / 9	イ ↓ P、 333 イ ↓ P、 252	9 / 14	同一記事「巷ニ満ツ応召美談」より	10 / 9	イ ↓ P、 333 イ ↓ P、 252
							8 / 5	類話 12 / 8				イ ↓ P、 258			イ ↓ P、 258			イ ↓ P、 258						
												イ ↓ P、 258			イ ↓ P、 258			イ ↓ P、 258						

←国民の「赤誠」→ ←出征遣家族と周辺社会→

B八	輝く形見の品々（六十の恤兵金）	陸軍恤兵部への手紙 2例 銃後の父から部隊長への手紙（同一部隊）
B九	一合取つても武士は武士（軍國の父に部隊長感 激）	
B一〇	戦線から幼児供養代（受取らぬ親も床し）	
B一一	拝領の恩賜金（有事に備えて三十年保管）	
B一二	白衣感激の大放送（聴取者みな泣く）	
B一三	一兵士の手紙（陣中より献金）	
B一四	病勇士魂の従軍（墓前に備える戦捷報告）	
B一五	征馬に贈る少女の純情（一錢宛の貯金を新安 号）	
B一六	パネー号の爆沈（女学生の捧げる純情）	類話 12／7
B一七	愛馬のたてがみ（戦場から供養を依頼）	口→P、 377
B一八	悲涙を呑んで勇氣百倍（八児を守つて救護法も 辞退）	12／22 関連美談12
B一九	父よ冥せよ！子よ健やかなれ！（飯塚中佐の遺 児の作文）	12／18、12／19／
B二〇	濱の人々の義心（出征兵士父の意気）	17／12／19／
B二一	兵よ、安んじて征け！（花嫁の誓いは固し）	
B二二	右手に杖、左手に国旗（八十老婆の熱誠より）	
類話2／5		
日本海軍が誤って撃沈した米砲撃艦への見舞い		前線兵士からの献金の申し出（手紙） 前線兵士からの見舞い 召集令状に応えられなかつた病者、「必ず行く」と 割腹

*新聞資料に関しては全ての調査を完了した「東京朝日新聞」（一九三七年七月から一九三八年二月まで）のデータを対象にした。

の母』という二種類の歌曲レコードとして発売され、さらに一九三七年十一月に東京日本橋高島屋で行なわれた「支那事変戦利品展」で「軍国の母／山内中尉母堂の手紙」として「展示」されて、人々の視線に曝された。一つの話が、新聞、大衆雑誌、レコード、展覧

会など複数の大衆メディアを流れたことが、「モダニズム」という大衆文化擂盤期を経て訪れた総力戦期の一つの特色でもあつた。（こうした美談の嚆矢は、「満州事変」の時に、活字ジャーナリズムや歌曲レコード、演劇などを通して流布した「肉弾三勇士」だった

〔加藤、一九六五〕。この時はことに新聞社とレコード会社がタイアップし、大競作になったという〔八卷・福田、一九七二、三〕。このような美談と戦時歌謡との重なりは、個々の美談との具体的な対応関係だけでなく、モチーフを共有しているというレベルのものも数多い。詳細は今後の課題としていたい。)

3、編まれたへ世間▽

(1) 「話」の配列

二つの付録の銃後美談のうち『美談』には、配列そのものに一つの論理を読み取ることができるが、反対に『感激談』にそのような配列の論理を明確に見ることはできない。『美談』の場合、〔A一二〕は兵士本人の応召／出征自体に題材をとった話、〔A一三～A一八〕は兵を出征させた肉親（家族）が手紙／慰問文を通して兵士の「武勇」を直接に鼓舞・激励する話、〔A一九～A二四〕は、出征兵士遣家族の生活上の健闘やその遺家族を支える近隣の援助などを主題にした話、〔A二五～A三二〕は軍の恤兵部や新聞社の献金募集という制度への人々の呼応を題材にしている。

この配列から、出征兵当人→出征兵の家族→出征兵との遺家族を支える地域／郷土→戦に沸騰する「国民」へと、同心円を描くように、銃後美談のなかの描かれた「世間」が外へ拡大していることを読み取ることができる。それは総力戦における「世間」の構造が、個人、家族、地域／郷土を巻き込んでいく姿をかたどっている。さ

らに、こうした「世間」の構造は、応召する兵士、その家族、そして地域を覆っていた銃後「後援」の制度とも重なっていた〔三井報恩会、一九三七参考〕。

一方『感激談』は、『美談』の反響を受けて落穂拾い的構成で出版したのではないかと思われる。しかしそこには一月号『美談』にはなかつた戦場の兵士から銃後へ出された手紙・遺書・献金などを語る新たなエピソードが含まれていた。それは前線から銃後への言葉が記され〔B六、一〇、一三、一七〕、前線と銃後という対の関係性を、よりダイレクトに具体化することになつていている。

(2) わきたつへ世間▽

まず戦に沸騰する銃後の語られ方から見ていく。それは、何よりも人々の献金／納という行為として語られる。「支那事変」時に、陸海軍の恤兵部などに集まつた献金は、それまでの戦争に比べると破格だった。『美談』の「全国挙つて献金獻品」〔A二六〕によれば、陸軍省恤兵部に寄せられた献金額は一九三七年七月一日から一〇月三〇日までに、一七七五万四三四四円六五錢にのぼり、これを日清戦争・日露戦争そして「満州事變」の陸軍への献金額と比較すると日清戦争＝二九一万九二八四円六七錢、日露戦争＝五七四万七一七〇円三四錢六厘、「満州事變」＝四七二万四九四〇円一〇錢になる。〔A二六〕はこうした数字から「今事變は如何に挙国一致、愛國心に燃えているかが窺われる」とした。（より詳しくは〔陸軍恤兵部、一九三八〕参考）

こうした軍の恤兵部の献金の他、東京朝日新聞社では軍用機を献

納する「銀翼」献金を募り、読売新聞社では戦車献納の献金を募つていた。この時期の両紙は、新聞社に献金にやつて来る人々を固有名詞を掲げて、連日競うように報道している。

美談集は、こうした「わきたつ世間」を、具体的な個人の話を通して語ろうとした。一例として「健気な六少女 納豆を売つて献金」〔A二七〕を取り上げよう。

……「皇軍の奮闘とその労苦は新聞やラヂオを通して、あど氣ない少年少女達の胸にも大きな感激を与えてゐるが」、東京市に住む日頃から近所同志の「大の仲良し」の六少女（二名が一三才、四名が一二才）は「もうじつとしていられなくなつた」。「私たちも兵隊さんをなんとかして慰めて上げませうよ」と誰言うとなくこう言ひ出した。「ええ、献金のことが新聞に出てゐるから、私達もいたしましようか？」『それがいいわ』とたちまち六人の意見は一致したが、『だつてお金がないわ』と一人が言つたので、幼い少女達ははたと困つてしまつた。結局「納豆売りをしてお金を儲けましょよ。そしてそのお金で献金すればいいわ」と決まる。その資金がないので一人の少女が父親に相談すると、事情を聞いた父親は「非常に感心」して「さういうお金なら喜んで出してあげよう」と資金を出してくれた。少女達は納豆問屋に行く。店の主人は、少女達の様子を見ていたが、別に納豆売りになる必要もなさそうな身装」なので不審に思い事情を聞いた。献金をしたいという少女達の言葉に感激した主人は、即座に三十本の納豆を寄付した。毎朝納豆を売つた少女達は、八日間で十円五十銭を稼ぎ、八月八日に陸

軍省恤兵部を訪ねた。係官の主計大尉が事情をたずねて以上の経緯が判明した。……

この話はまず東京朝日新聞（八月一五日）に「樂しき六少女の誓い／納豆買つて献金」という見出しで掲載された。しかし新聞記事に記されていた、娘の話を聞いた父が「許したものかどうかと一時は迷つた」という要素は「美談」では消されて、少女達の善意が一切の疑惑をはさまれずに「兵隊さん」に届いた話として語られる。この小さな改変によつて、末端の「善意」が「世間」の感激の連鎖を経て「國」に直結する物語がかたどられることになった。

また、こうして集められた話題が美談として活字化される時、固有名詞を伴つた発話形式の文体が重要な役割を果たしていることも指摘しておきたい。新聞の「納豆売りをしてお金を作つて支那で働く兵隊さん達に送つてあげましょう」という簡単な記述は、「美談」では少女達の声のやり取りとして造形される。登場人物の言葉が事実か否かという以前に、こうした「口承／声」を引用するというスタイルによつて抽象的な「國民」に、固有名詞を持つた具体的身体が与えられるのである。

ところで、この「納豆を売つた金を献金する」という例は、銃後美談のなかで子供達が献金を行なう話として他にも登場する。管見するだけでも、「支那事変」時にはこの後も、「祖國愛は沸る／献金納豆売りの二少年を始め、『戦線の寵兒』へ喜捨殺到」（読売新聞九月一日）、「朝夕、納豆売りして／皇軍へ送る慰問金／床し／少女の銃後美談」（東京朝日新聞）一二月八日などが報道される。さ

らに「満州事変」まで遡ると「銃後の話／光榮極み無き／納豆を売る姉妹」（東京日日新聞・大阪毎日新聞『サンデー毎日臨時特別号 日支事変忠勇美談集』昭和七年五月）、「孝行納豆売りの誠心」（陸軍省内新聞班内『つわもの』編纂『満州事変の生んだ美談佳話』昭和六年）などがある。「納豆を売る」ことが、當時どのようないメージを想起したのか正確には把握しにくいが、最後に挙げた「孝行納豆売りの誠心」は、献金を目的に納豆売りをするのではなく、もともと貧しい家庭を支えるために納豆売りをしていた子供が、その稼ぎを献金したという孝行美談と銃後美談が接続したような例だ。また「A一七」の、納豆問屋が少女達が「別に納豆売りになる必要もなさそうな身装」なので不審に思つたという一文からも、「納豆売り」にはこうした貧しい家計を支えるというイメージが纏綿していたことがうかがえる。即断はできないが、もともと孝行美談の要素になるような身振りが、総力戦の構造のなかで「健氣」な子供を語る要素として銃後美談に繰り込まれたのだろう。

また、この時「納豆を売つて献金する」美談が流布することにより、それが実際に模倣されていく可能性があつたことも否定しきれない。美談がメディアを流通する過程で、それが日常のなかで再生産される契機をここに読み取ることもできるのではないだろうか。

『美談』には他にも、献金／納に「わきたつ世間」を語る次のようない話が掲載されていた。

……京城の朝鮮人学生が愛国婦人会朝鮮本部に「家庭の飯米を節約した」と米八俵を荷車にのせて持参〔A一五〕。平城の朝鮮人の

「バタ屋」三四人が同地憲兵隊に十五円を献金〔A一五〕。静岡で駄菓子屋を営む老人が海軍省に梅干しと梅酢を持参〔A一八〕。東京・小菅刑務所の囚人が入所以来の作業でためた金をすべて献金、全国の刑務所でも労作時間を延長して献金のための作業を行なう〔A一九〕。警視庁に「私は実は支那人なのです」と紳士が三十円の献金。その後の調べで麻布区内の洋服商と判明〔A三一〕……。

こうして編まれた銃後の献金美談の特色の一つは、その主人公が子供／老人／朝鮮人／娼妓／囚人など、当時の社会のなかで周縁部に位置付けられていた人々が語られていることだ。つまり主人公達は、美談の「世間」のなかで「国民化」されていくことになる。そこに総力戦の構造のなかで語られた「世間」が「銃後」という時代の論理のなかで拡大していたさまを読み取ることができる。

(3) 「女の世間」

銃後の「世間」のなかでも特に冗舌にかつ劇的に語られるのは、妻や母の「女の世間」だ。家族の死を戦地に居る夫や息子に報せずにいた話〔A一七〕や父親の葬儀に部隊から一時帰郷した息子を迎え入れようとしなかつた母の話〔A六〕など話題の内容は異なるものの、いずれも家族の紐帯より戦と国家の論理を優先させた妻や母に美談の主題が置かれたものだった。

銃後美談のなかで、この「女の世間」がクローズアップされるのは、総力戦の構造に由来する。単純化してしまうなら、銃後とはこれまで男が前面で働いていた場所を女性が支えざるをえない状況が訪れるなどを意味し、それは女性に一つの社会的機会が与えられる

ことですらあり、この「女の世間」は、戦の「チアリーダ」としての役割を果たしていた（詳しくは「加納、一九九五、六一～三二」）〔若桑、一九九五、五九～一八〕。それは別の言い方をすれば、総力戦のなかで「女の国民化」が促進されることでもあった〔上野、一九九八、三一～三八〕。

「ゴム長の女留守隊長／一家四人が出征」〔A一九a〕はそうした「女の世間」を、一人の妻を通して語る。

……主人とその弟、雇い人一人、計四人が前後して召集された東京市渋谷区のある鮮魚店で、一人残された妻が、「朝の真暗いうちからゴム長靴をはいた雄々しい姿で、荒くれ男に混じつて魚河岸通り、帰つて来るとお得意廻りから仕出し、出前と女手一人で孤軍奮闘」、町内で「銃後の女留守隊長」と評判だった。……

これも、東京朝日新聞（一九三七年九月一四日）に掲載された話題の一つだ。主人公は出征兵士の妻だが、それは兵士を支える家族の物語でもあり、彼女を「女留守隊長」と呼びながら取り扱む近隣の物語でもあった。そして「女留守隊長」という比喩は、銃後の「女の世間」が戦場の延長上に置かれた総力戦のなかでこそリアリティを持つ。

そしてこのような語られた「女の世間」を中心で支えているのは妻以上に母の存在だ。母は、それまでも英靈の武勇を語る美談などでも冗舌に語られた。たとえば、「満州事変」時の美談「肉弾三勇士」においても、その物語化の契機となつた小笠原長生『忠烈爆弾三勇士』（一九三三、実業之日本社）には、「三烈士の母」という章

が設けられていた。母こそ、兵士を主人公にした「軍事美談」（特に英靈美談）と「銃後美談」という二種類の美談を繋ぐ要、言い換えれば前線と銃後を繋ぐ要になつたとも言える。

我々はそうした「母」像の一つの原型を、日清戦争時に作られ、国語の国定教科書に第一期から第五期（一九〇四～一九四五）まで採用された「水兵の母」に見ることができるだろう。

……一人の水兵が軍艦上で女手の手紙を読みながら泣いている。上官がそれを見て、「命が惜しくなつたか、妻子が恋しくなつたか」としかると水兵は手紙を差し出した。手紙は母からであり、それは未だ手柄をたてない息子を、何の為に戦に出たのか「一命を捨てて君の御恩に報ゆるために候わざや」と叱咤していた。上官も思わず涙した。……〔中内、一九八八、五九～六三より再引用〕この「水兵の母」の類話と言えるのが「美談」のなかの「御身の働きを聞かず／兵士を叱る軍国の母」〔A一六〕だ。

……舞台は上海の王家宅の暫壠の一隅。一人の兵士が母からの「御身の○○部隊及び御身のお働きについてはいささかも承らず母は誠に殘念に候」という手紙を読みながら涙していた。「ああこれぞ第二の『水兵の母』の手紙である」、それと知つた部隊長始め将兵一同は、「お前はよいお母さんを持つて仕合せだぞ」と涙で頬を濡らした。……

「第二の『水兵の母』」という言葉は、これが「水兵の母」を下敷きにしていることを明確にしていた。この話題も最初は東京朝日新聞（一九三三年一〇月二九日）に「暫壠に『水兵の母』／『出征の

日の感激忘れたるや」／手紙に悲涙の一兵士として掲載される。しかしそれは「A一六」とは若干語り口が異なっている。新聞記事は前線特派員の目撃談として一人称で綴られ、それに兵の故郷の母に取材した「おめおめ帰るまい」／体に期待する母親という記事が併置された。実は特派員の記事には、部隊長始め将兵一同涙で頬を濡らしたという場面は、一切無い。新聞から『美談』へ、その過程で上官が共に涙する場面が加えられ、いつそうあからさまに「水兵の母」をなぞる話として創り上げられることになった。

そしてかつての軍国美談の一つ「水兵の母」は、ここで「銃後」を語る話として再生産されることになった。「水兵の母」自体が、戦場の話でありながら兵でも上官でもない「軍国の母」像を立ち上げることを眼目とした話であり「中内前掲書、六三」、「銃後」という時代の文脈のなかで語り直されることで、いつそうその主題を際立たせることになったといえる。

銃後美談のなかでこうして「母」を前景化する顕著な例は「従軍嘆願書／虚弱な子を持つ父と母」〔A一八a〕だろう。話は、一人の母が陸軍大臣に出した、息子の従軍を願う手紙が中心になる。

……息子は、一度応召したものとの身体虚弱の故を以て即日帰郷を命ぜられ悲嘆この上なく、毎日悶え苦しみ遂に〇日より飲まず食わずして泣くばかりの我が子、このままでは死んでしまう、「親として我が子の死が立派に死なせたい母の念願、何とか方策はございませんでしょか」。陸軍当局もこの手紙に感激しこの母の「熱誠」を叶えさせたいと望んでいる。……

この話のもとは東京朝日新聞（一〇月八日）に掲載された「大臣様お願いです」／母の名で従軍懇願」という記事だった。しかしそこには大きな違いがある。紹介された手紙の文面は「A一八a」と同一だが、新聞記事はこの手紙は実は悲嘆にくれた本人が母親の名をかたって自分で書いた手紙だったことを明らかにしている。そしてそれを非難するのではなく、むしろそこまで思い詰めた本人の「強い決心」に同情し肯定的に語っていた。

しかし、この話題が木村の美談集「一九三七」さらにキング付録に収録される時、事実は削除／隠蔽されて、「母からの従軍嘆願」という話として作り上げられる。結局、装われた「母」の言葉が実体化し、「母」はフレームアップされていくことになる。

こうした銃後美談の「母」像は、当時の女性雑誌のなかで妻や母のあるべき姿やセクシティを「母性愛」へ収斂させていくような言説が生産されていたこと〔川村、一九九六、一九四〇二二六〕と重なり、また雑誌に描かれた「銃後」の女性達の图像表象のありよう「若菜、一九九五、一二六、一三一」などとも呼応していた。

この「母性」こそが、総力戦において語られた「銃後」における「女の国民化」の焦点の一つだったと言えるのである。

（4）からみつく「世間」

言葉によつて創り出されるこうした美談のなかの「世間」のまことにやかさは、一方でしばしば綻びを見せる。話の向こう側に存在する、互いの視線が交錯する銃後の日常が美談の種を醸成していく過程が、はからずも語られている場合が少なくない。

たとえば、先に取り上げた「御身の働きを聞かず」〔A一六〕の母の手紙には、「町内出身者にして抜群の功を樹てられ名誉の戦死傷者ある旨新聞にも伝えられ候に御身の〇〇部隊及び御身の働きを聞かず」という一節がある。それは、息子が「未だ手柄をたてていない」ことを母に意識させる錆後の「世間」を語ってしまう。

この「水兵の母」とほぼ同様の内容で「父」を主人公にした「一合取つても武士は武士／軍國の父に部隊長感激」〔B九〕は父が出征中の息子の部隊長に息子に手柄を立てさせてほしいと出した手紙を題材にした話だが、その手紙には「人がみな私に、お前の息子は特務兵であるから、こわい事はない、安心である、と申すのが、私は残念でたまりません」という文言が記されている。この父も自分の息子が手柄をたて難い立場にあることを、引け目に感じざるを考えないような「世間」がからみついている。

こうした「からみつく世間」をはつきり見ることができると例は「濱の人々の義心／出征兵士の意氣」〔B二〇〕だ。

……鳥取のある漁港町のある漁夫の家では、一人息子が出征したあとに、老いた病弱な両親と懐妊中の妻の三人が残されていたが、「家計は豊かではなくその日その日の生活に困るようになつた」付

近の人々は軍事扶助を願い出ることをすすめたが「私のような家庭が、そんなことをお願いしては、お国に相済まぬし、また梓に対しても申証がない」と聞かない。同じ漁船の乗組員一同が、病気で漁労に従事できない老父のために出漁ごとに配当金を出し合い、一家の面倒見なければ「銃後を護る自分たちの責任が相済まぬ」と、そ

の金を再三持参したが老父は受け取ろうとしない。が、最後は、一同の志に反しては、と老父はその金を受け取ることにした。だが老父は無報酬で金をもらうことをいさぎよしとせず、病臥していた体を「無理矢理に」引き起こし、漁具の整頓、修理などをして間接的に漁を手伝つた。そして結局、病弱な老母も魚行商に出掛け、また妊娠中の嫁も製糸女工として働きに出るようになった。……

一つの家族を世間の視線が取り囲む。「義心」と名付けられた郷土の善意が、家族を「美談」の主人公に追い込む様を読み取ることができる。それは、総動員という政治が末端でどう顕在化するのかを、やはりはからずも語つてしまつてはいる。それは美談のまことしやかさのなかで語られた「世間」の規定力の強さだった。

そしてさらに、この「濱の人々の義心」の末尾に次のような一節が添えられていてことに注意しておきたい。「出征兵士を家庭から出しているのをいい口実として、ややもすれば他人の同情を求める座して食おうとする不心得者もある中に、この〇さん一家の涙ぐましい生活戦闘ぶりは、地方民の感激的となつてゐる」。それは錆後の「生活戦闘」を称賛する「世間」の視線が、一方で「不心得者」を非難／告発する視線と表裏一体であることを示している。

反復される納豆売りをして献金するという子供達の身振り、恤兵部の窓口に殺到する人々、息子の手柄をことさら意識せざるをえない母そして父、時代の善意に閉まれる家族、こうして「編まれた世間」を見てくると、上から一方的に働く力の政治のなかで錆後の日常のリアリティが造られるのではなく、日常の表層における

人と人の視線と言葉の交錯のなかに現出する相互規定性を持つたりアリティが、「美談」が凝固していく鑄型をかたどつていい、さらには語られた「美談」が銃後の日常のリアリティを再生産していくという、言わば円環の仕組みを想定することができるだろう。補

(*)

4、美談のへ世間▽・流言のへ世間▽

銃後美談をこうして扱つてくると、「これは戦時下の日常の表層に触れただけだ、民衆の本音は違うところにあった」という違和感が表明されるかもしれない。それもまた否定し得ぬ歴史語りの一つだ。しかしそうした語り方は、「美談」が表層の建前であるのに対して戦時の噂話こそが民衆の深層の本音であるという二項対立に横滑りしていく危うさを胎んでいる。そしてそれは、軍国美談に対する解釈として既に存在する、新聞などが「国民の戦争支持をする」という「世間」を構成する一つのリアリティを形にしていたはずだ。歴史社会学の立場から、憲兵隊などによる戦時下の流言調査を研究した佐藤健一は、こうした流言を「民衆の本音の自然発生的反乱」として読みしていくという姿勢を避け、まず日常生活からどのような枠組みとメカニズムにより「流言」が析出されていったかを問う必要があるとしている「佐藤、一九九五」。

ここに、メディアのなかで美談を収集／編纂することと、当時の体制のなかで流言を調査／編纂することと、表裏の言説生産の仕組みとして見ていく方向が見えてくる。建前と本音という枠組みによりかかるのはなく、また単に検閲を言挙げするのでもなく、一つの

となしに建前／本音を読み込んでしまうことは、歴史の遠近に逆らうことになるだろう。

先に、銃後の美談を生み出す視線が同時に告発／非難の対象を生み出す視線と表裏あることに触れた。最後にこの問題を敷衍し、本音／建前の図式を越える、もう一つの筋道を開いておきたい。

総力戦下では、体制に都合のいい話は「美談」、都合の悪い話は「流言」と名付けられ、収集／編集されていた。違いは、一方はメディアのなかで冗舌に語られたのに対し、一方は、殊更に語られることがなかつた点だ。しかし銃後では秘密戦／防諜戦の名のもとに、人々は「井戸端会議」の場などでの話を慎むことや口にしてはいけない事柄||「流言」を内面化し、日常の談話自省することを求められていた「大坪、一九四」。それは美談と同様に銃後といふ「世間」を構成する一つのリアリティを形にしていたはずだ。歴

歴史の過程に本音と建前を読み込むことには慎重でありたい。美談がかたどる「正」「善」「良」は、時代と社会が構成するものであり、想定された感動も歴史的産物以外の何物でもない。美談がその時代のどのような言語空間のなかにあったのか、それを問うこ

時代がどのように言葉／話を収集して編纂していくかという、言

語空間の編み上げられたのなかに、総力戦の時代の日常のありようを問う可能性が出てくるだろう。

それには、さらに包括的な戦時下メディアの調査が必要になり、

本論はそのごく端に立つだけにすぎない。おそらく、それはどこまでも歴史の表層を問う作業になる。しかしその表層の言葉の分析こそが、我々の戦の日々の負の想像力と戦を志向した幻想のありようを浮かび上がることになるだろう。

まで見てきた美談集の銃後美談を構成した手紙が採用されている場合があることに気付く。管見した例のみ以下に掲げておこう。

付表2 美談と戦時文範のはざま

◇『出征兵士に送る男女慰問手紙文集』東京出版通信社（一九四〇）の第七章「銃後の誠心を」に掲載された文例四点のうち三点は、キング付録美談集と対応している。

七、銃後の誠心を

付記、本稿は一九九九年度の日本□承文艺学会年会（沖縄国際大学）で発表した草稿をもとにしている。報告に対してご質問やご意見を下さった参加の方々に深く感謝したい。

1、特務兵の父より ↓ 「感激談」〔B九〕と対応

2、恩賜金を献上 ↓ ハ [B一] と対応

3、従軍をお許し下さい ↓ 「美談」〔A一八〕と対応

4、不幸な伴の代わりに

*この三点は、他にも元文社編『出征兵士に送る慰問文手紙文』東洋書房発行（一九三九）にそのまま掲載されている。

◇『出征兵士に送る慰問文手紙文 女子用小学生用』東京出版通信社（一九四〇）に掲載された次の文例三点は、キング付録美談集と対応している。

黒髪に添えて ↓ 「美談」〔A一五〕と対応

子を叱る母 ↓ ハ [A一六] と対応

夫の戦死を感謝 ↓ ハ [A一四] と対応

補（*） 一般に「美談」が規範化し我々が自ら産出する言葉を規定していく仕組みを、はつきり捕捉することは難しい。しかしながら銃後美談に関しては、その一つをつかむことができる。
この総力戦期には 戰時用文範（手紙の書き方本）が出版されていた。前線の兵と銃後を結ぶメディアはもっぱら郵便だった。先に指摘したように、「美談」のなかの銃後の出征兵遣家族をめぐる話〔A一三～A一八〕の全てが「手紙」が核になつた話だつたことは偶然ではない。また慰問袋を作ることや慰問文を書くことが、地域や職場、学校などで組織的に行なわれた。手紙というメディアを通して銃後の人々の言葉が総動員されていたのである。

こうした戦時文範をひもとくと、そこに収められた文例に、これ

誰がどんな目的で書くか、その状況にあわせて細分化された構成は、日常生活から言葉を動員するために周到に作られた仕掛けだったことを示している。実際には文例を丸写しすることはなかつたか

もしれないが、一方で文範の存在により手紙を書くこと自体を促され、どういう指向を持った言葉を記すべきか、その指針を与えられたことも確かだろう。

戦後、柳田国男は戦時文範について次のように述べている。「一度の大戦争には、多数の青年壮年が家郷を離れ、平生手紙を書かぬ人も大分書いたが、その手紙には決まつた型のものしかなく、個性などは少しも出ていなかつた。(中略) 決して検閲の厳しかつたためばかりでない。教えてもらわなければどう書いてよいかを知らなかつた者が多いのである。そうして一方には、広告などは少しもないで戦時用文章というたぐいの手紙文範がものすごく売れていたのである。」「柳田、一九四九(一九九〇、四九四~四九五)。」

銃後美談が、単に「読まれる」だけでなく、人々が自ら筆をとり前線にむけて文字を綴るという場面に、一つの規範として入りこんでいく具体的な仕掛けが、存在していたのである。

季刊現代史
一九七三「新聞資料構成・軍国美談の構造」(季刊
現代史)一九七三年五月号
木村定次郎
一九三七『支那事変 忠勇報国美談』龍文社
佐藤健二
一九九五『流言蜚語』有信堂

一九三八『支那事変 盡忠報国感激美談』龍文社
財団法人三井報恩会

一九三七『支那事変下に於ける銃後の後援に就いて』
田中丸勝彦
一九九八「英靈」の発見(関一敏編『民俗のことば』朝倉書店
一九九八所収)

中内敏夫
永峰重敏
一九八八『軍國美談と教科書』岩波書店
一九九七『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部

藤原彰
柳田国男
一九八二『昭和の歴史 日中全面戦争』小学館
一九四九『標準語と方言』(柳田国男全集二二)ちくま文庫
一九九〇所収)

参考文献(本文中に書誌を挙げなかつたもの)

- 上野千鶴子
一九九八『ナショナリズムとジェンダー』青土社
大坪義勢
一九四一『國家総力戦 防諜講話』大日本雄弁会講談
加藤秀俊
一九六五『美談の原理—爆弾三勇士』(朝日ジャーナル)四月一日号
加納実紀代
一九九五『増補新版 女たちのハ銃後▽』インパクト
出版社
一九九六『セクシュアリティの近代』講談社
川村邦光